

Title	藤田幸一郎著 都市と市民社会：近代ドイツ都市史
Sub Title	Koichiro Fujita, Stadt und bürgerliche Gesellschaft : Moderne deutsche Stadtgeschichte
Author	矢野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1988
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.81, No.3 (1988. 10) ,p.535(175)- 539(179)
JaLC DOI	10.14991/001.19881001-0175
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19881001-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



藤田幸一郎著

『都市と市民社会
——近代ドイツ都市史——』

（青木書店 1988年、313頁＋XVII、4,000円）

本書は、すでに1984年に『近代ドイツ農村社会経済史』（未来社）を公けにし、その後も精力的に近代ドイツ社会経済史に関する業績をものにしていく著者の労作である。著者自身が「あとがき」に述べているように、本書は必ずしも体系的に書かれたわけではなく、最終章を除いてはここ数年間に発表された論文を集めたものである。とはいえ、氏の問題関心と問題設定はきわめて明確で、各章は論理的に構想されており、その意味で本書はかなり体系的である。

著者の問題関心は、中世都市から近代都市への歴史的移行過程を解明することにあるが、氏は、ウェーバーが、中世北欧都市と近代資本主義との関係を連続と断絶の両面性において把握しようとしたことを評価しながらも、ウェーバーが言及しなかった中世都市から近代都市への歴史的転換過程を研究の対象におく。この問題はわが国ではすでに大塚久雄、増田四郎両氏により精力的に研究された問題でもある。大塚が独立生産者たちによる農村工業に近代資本主義の源を求め、中世都市と近代資本主義との断絶を強調したのに対し、増田は制度の歴史的転換をこえて継承される市民の公共意識を強調し、都市の連続性を主張した。それに対して著者は、中世都市から近代都市への歴史的転換・移行過程を氏独自の観点から連続と断絶の両面性から分析しようとするのである。

その際、氏はウェーバーに立脚して明確な中世都市概念と近代都市概念から出発する。前者

は「都市ゲマインデ」として経済的に「市場」権をもつ経済団体であり、政治的には市民の自治権をもつ政治団体であり、社会的には市民身分の誓約団体である。それに対し後者は、都市共同体が経済的に解放され、自律的市場経済に組込まれ、政治的には都市の政治的自治権が中央集権国家に吸収され、解放的住民自治に転化し、社会的には誓約共同体にかかわって結社、個人主義的組織原理にもとづく社会的関係が成立した都市である。氏は前者をコルポラツィオン、後者をアソツィアツィオンと端的に特徴づけ、コルポラツィオンからアソツィアツィオンへの移行過程を問題にするのである。

こうした視点から氏はドイツの都市を研究の対象にしたが、対象をできうるかぎり連続と断絶の両面性を強く持つ都市に限定するというやり方をとった。すなわち、中世都市から近代都市への移行における連続が前面に出ざるをえない都市国家的性格をもつドイツ帝国都市でも、また断絶が強調されざるをえない新興のルール炭鉱業都市でもなく、両者の中間的存在たるプロイセン領のマルク地方の諸都市、特にザウアーランド地域の中世以来の商工業都市イザーローンを中心に、アルテナ、リュエデンシャイト、ハーゲン、ドルトムントの諸都市を対象にしたのである。換言すれば、氏はマクロレベルでの連続と断絶の両面性をミクロレベルで歴史的に検証しようとするのである。

本書のもう一つの特徴は、コルポラツィオンからアソツィアツィオンへの移行を、経済的側面のみならず政治的、社会的側面からも考察し、いわば都市の歴史の全体的把握をめざそうとしているところにある。マルクの諸都市の経済的発展過程を解明し、それが都市の政治・社会構造にいかなる影響をおよぼしたのかを、特に都市の自治をめぐる市民相互の政治・社会的諸関係に焦点をあてて分析しようとするのである。こうした観点から、氏は、コルポラツィオンからアソツィアツィオンへの移行・転換期である18世紀後半から19世紀末期までの上

記諸都市の経済・社会・政治過程を全体的に把握しようとする。

本書は二部構成で、第一部は19世紀前半まで、第二部は19世紀後半期を対象とする。

氏はまずマルク諸都市の19世紀前半までの経済的發展を分析する（第一章）。近代都市の成立において農村工業が果たした決定的役割というシェーマに対して、氏はマルク諸都市の「復興」の歴史的意義を強調する。18世紀末以降の新興産業部門（真鍮留金・ボタン製造業と留針・縫針製造業）の登場に際し、前者では非特権的のツンフト手工業者が主要な担い手となり、後者においては、商人・元締親方主導の發展がみられたという。氏は、工業生産におけるこうした新興産業の發展の背後に、遠隔地商業に依存する都市商業の意義を強調する。こうした都市の「復興」は、都市の自治をめぐる市民相互の政治的關係に影響を及ぼしたという。ツンフト制による門閥支配は動揺し、ゆるやかな職業代表側への転換がみられたが、他面で門閥商人層の支配は依然堅固であり、同時に都市「市民自治体」から排除された「居留民」に対する身分制的排他性は温存され、閉鎖的コルポラツィオンとして存続したというのである。

第二章は、イザーローンを中心に19世紀前半における経済的社会的政治的發展の分析にあてられる。イザーローンでは真鍮加工業から青銅工業が派生し、商人が工場主として登場し、1820年代には工場制への移行がなされた。縫針製造業においては40年代に工場制への移行がみられた。氏の主張する点は、こうした工場制への移行が手工業的小経営の没落を招くことなく、むしろ、手工業小経営を基礎として「工場＝マニュファクトゥア」が成立し、両者が一定の分業関係を形成したという点である。しかも対外的には「金属工業圏」が形成され、イザーローン市に集中していた真鍮加工業は、市における青銅工業の成長に押し出される形で農村部へ移動し、かかる農村部の工業化が、イザーローン市の経済的復興の成果として現れたという。

第二章ではさらに、こうした経済的發展が都市の社会層構成にどのような影響を与えたのか、市民自治をめぐる都市社会層間の関係がそれに応じてどのように変化したのかが考察される。氏は経済的社会的政治的關係を分析することなく常に相互に関連させようとする。社会層構成の分析は上層、中間層、下層の三層に分けて行なわれ、さらに、かかる社会諸階層が市民自治をめぐるどのような関係を取り結んでいたかにあてられる。都市の営業特権の否定ならびに国家の官僚統制の強化にもかかわらず、依然として都市商人は重要な役割を演じ、門閥支配に代わって新たな富裕市民の寡頭支配制がもたらされた。彼らは、都市中間層に属す営業市民と共に特権的市民を形成した。身分制原理による都市自治体は解体されたが、新たに形成された有産者としての市民自治体は、都市下層を形成する「非市民」に対しては排他的閉鎖的關係に立っていたのである。

こうした「有産市民」による「市民自治」に対する「非市民」としての都市住民の一つの回答が1848～49年革命であった。しかし、マルク諸都市では、都市のあいだに労働者・下層民の階級的連帯関係が広範囲に成立しえなかった。その原因がどこにあるのかを分析すること、これが第三章の課題である。著者によれば、その原因は都市の存在様式および市民意識と関係している。しかしそれはマルク諸都市の存在様式ではなくプロイセンの都市に共通するところに求められた。すなわち、都市市民はプロイセン「国家市民」であると同時に「都市市民」であるという二重性によって、都市上層市民は都市市民自治における主導権確保に努力したが、国家に対しては弱い「政治的公共」しかもたなかった。それに対応して、都市下層も二重的性格をもち、彼らを排斥する「市民社会」を拒絶したが、上層市民の都市支配を打倒して、さらにプロイセン国家権力にたちむかおうとした時、都市と農村、都市と都市との間の「階級的連帯」にもとづく政治的変革は形成されなかった。

このように、氏は19世紀中葉までのマルク諸都市のコルポラツィオンの解体過程を経済、社会、政治の諸側面から把握した。第二部において氏は19世紀後半におけるマルク諸都市のアソツィアツィオンへの移行・転換過程を叙述する。しかし分析の重点はマルク諸都市の社会的、政治的過程におかれている。

まず第四章で、マルク諸都市の19世紀後半における人口の空間的移動と都市の膨張という問題が取扱われる。産業と交通とくに鉄道網の発達による人口移動の増加が考察される。氏は都市に定着しない「人口流動」に注目し、それが第一に、農村からの季節的な出稼労働者、第二に、各地を遍歴する手工業職人・徒弟、日雇・奉公人、行商人等、第三に、浮浪者、生活困窮者、犯罪人等の最下層民であることを析出した。氏はさらにこうした「人口流動」とは区別される都市に残留した「移住人口」にも注目した。1850～60年代においてはライン・ヴェストファーレンからの労働力流入が中心で、彼らは手工業者を含めて鉱工業熟練労働力の主要な担い手を形成し、1870年代以降は東ドイツ農村からの遠距離移動が盛んとなり、彼らはルールの不熟練労働力を構成した。後半の分析は、人口流入による都市人口の膨張がもたらした住宅問題に係わる賃貸住宅への移住者の収容問題にあてられる。都市には様々な形態の賃貸住宅が存在し、都市内部の人口流動はきわめて活発であったことが示される。

第五章ではこうした都市人口の社会層構成が「職業」および「財産と所得」という二側面から経済的に分析される。一方で、古い職業がひきつづいて維持され、新たな社会的分業の展開への対応によって金属手工業に新しい職種が創出され、他方で、新しい産業部門の台頭と大企業の成長により、職業構成が変動したことが示される。次に、都市社会層が上層、中間層、下層に区別して検討される。著者の結論は要約すると次のようになる。上層においては有力企業家が中核的地位を占めつづけ、また経営者とい

う新しいタイプの企業家が創出され、また都市行政、国家の地方司法・行政機構の拡大による官吏も都市上層を形成していった。中間層においては、都市中間層としての手工業者は減少する傾向にあり、比較的富裕な独立自営の手工業者が存在する一方、商業・サービス業における独立小経営者が増加した。手工業者の職業身分としての経済的同一性が失われていったのである。新中間層においては企業中級管理職が形成されたが、職員の多数を形成したのはむしろ下層に属していた。下層においては、工場労働制により変化をこうむった手工業的序列と熟練工養成制度は堅持され、「職人労働者」として工場の基幹労働力を構成した。他方で多数の不熟練工が流動性の高い労働力として都市に出入りし、都市下層を形成していた。最後にこれら社会諸階層間の相互の社会移動が考察される。結論的に要約すると、19世紀後半においても社会移動を阻む要因は強く残り、労働者層においては階級的再生産がみられた。専門工、手工業者は都市下層と中間層とのあいだの関門をなし、彼らが労働組合運動、政治運動の中核を形成することになるのである。

第六章は、こうした都市住民の個人的自発性にもとづく社会関係としての「結社」、法によって市民的意志結集の公共の場としての「市民自治体」の両側面から、マルク諸都市の「近代市民社会」の実像を捉えることが課題となる。氏によれば、都市の協同体的組織の解体のなかで孤立化しつつあった諸個人が新しい社会的連帯を結社に求め、こうした結社への参加を通じて社会的帰属意識、階級・階層意識を獲得していった。こうした個人主義的組織原理にもとづく結社は都市の枠をこえ国民的広がりをもつようになるが、全国的連盟として確立されると実質的には組織された結社として個人の意志から独立していくことになる。他方で、「市民自治」という「政治的公共」がどのように変化したのか、が考察される。官僚によるプロイセン中央集権国家と、古くから存在する地方自治体（ゲ

マインデ) という二元論は 19 世紀後半においても克服されずに維持され、都市は中央集権国家の地方行政機関であると同時に、独立の市民自治体でもあったのである。市民権の拡大がなされたが、労働者、日雇、奉公人のほとんどは市民権をもたぬ住民にとどまり、「市民」から区別された。こうした市民自治からの都市下層民の排除に対応して、市民代議制における名望家支配は 19 世紀末期まで維持された。都市行政においても官僚行政機構が形成され、名望市民と共に専門官僚が都市行政を運営していくことになる。しかもブルジョアの名望家層は政党（とくに国民自由党）を通じて国家権力との結びつきを強めていった。

それに対して、市民自治から排除された労働者は独自の「社会主義的公共」を発展させた。労働者の結社は最初から政治的性格を帯び、社会主義運動と不可分の関係にあったのである。最終章（第七章）の課題はこうした労働者の結社の分析におかれる。

氏の考察は政治結社、職業結社、文化クラブにまで広がる。労働者の政治結社は、ラサール派労働者協会からドイツ社会主義労働者党を経て、社会主義者鎮圧法下での弾圧、この鎮圧法の廃止による社会民主党の大衆政党への飛躍的發展までが取り扱われる。第二の職業結社は職人組合と労働組合が考察の対象となる。労働者の「自助」という性格をもつ労働者共済金庫をよりどころに結成された職人組合は、労働者のアソツィアツィオンという新しい連帯様式をもつものであった。官憲と上層市民による弾圧によって打撃をうけ、社会主義者鎮圧法の廃止にいたるまで壊滅状態にあった労働者・職人組織は、1889～90 年のストライキを行なったが、それは彼らの自律的共済金庫をよりどころとした連帯を維持しえたからである。それに対して不熟練工においてはこうした熟練工の連帯性が欠落していたという。ドイツ金属労働者連盟の結成によって不熟練工を含む産業組合への転換がみられた。こうして、労資関係における組織

的対抗の時代が始まることとなった。最後に氏は労働者文化クラブをとりあげる。ラサール派の労働者協会結成後に成立した労働者固有の文化クラブは、1890 年の社会主義者鎮圧法廃止後の時期に政治結社、職業結社の成長と対応して、社会民主主義的労働者文化クラブとして普及していった。労働者文化クラブは市民社会の中で閉鎖的世界をなしていたが、他方で社会の中で強固な地位を占めつつあった。氏は、労働者文化クラブが、ひいては社会民主党そのものが社会的統合と孤立との矛盾のなかにおかれていた、と結論づけるのである。

以上が本書の主要な内容である。本書は、いわゆる中世都市でもなく、19 世紀中葉以降に近代的鉦工業都市として発展した都市でもない中間的存在としてのマルク諸都市を対象とし、コルポラツィオンからアソツィアツィオンへの移行・転換という視点から、そこにおける経済・社会・政治の相互関係を歴史的に分析している。かかる視点はユニークであり、本書はそれゆえ評価されてしかるべきである。以下、本書に対する評者の疑問点、批判点を述べよう。

氏はマルク諸都市というミクロの世界に限定したが、氏の立場は、そこにドイツにおける市民社会成立史の縮図が見い出しうるという前提に立っていると思われる。すなわち、マルク諸都市のコルポラツィオンからアソツィアツィオンへの移行過程は、中世都市との断絶と連続の両面性をもち、したがってドイツにおける中世的世界から近代市民社会の移行も断絶と連続の両面性によって特徴づけられるというのである。氏の論理はまさにマルク諸都市の独自の歴史過程は、コルポラツィオンからアソツィアツィオンへの通時的移行において一般化しうるというところにある。しかし、そこにはアナロジーは見い出しえても、ミクロレベルとマクロレベルとの関係そのものは具体的に叙述されているわけではない。氏は、マルク諸都市が

独自の歴史的展開を示しつつも、ドイツ全体の歴史的過程との同一性のなかで論述しており、マルク諸都市の独自性がいつのまにか消滅している。それは、私見では氏の地域史研究が社会集団の労働の質ならびに彼らが生活する社会的政治的空間における社会的結合関係を充分には分析しないまま、コルポラツィオンからアソツィアツィオンへの一般的な歴史的移行過程に結びつけたからであると思われる。ミクロの地域史研究は、普遍化に対して一定程度の禁欲を必要とし、他の地域史の比較検討をまわって普遍化しうるように思われる。

評者の批判の第二点は、社会諸階層が個人の集合体として理解されているところにある。特に、定住しない流動・移住人口の場合は、明らかに孤立化した根無し草の個人が家族的社会的連帯から取り残されたものとして想定されているのである。しかし、労働者の居住空間を賃貸住宅の形態からではなく、社会集団の社会的結合形態として把握し、そこにおける結節点として家族の社会的意義を強調すれば、流動・移住人口と部屋を貸す家族との間にある種の連带的関係、家族の非公式の開かれた体系が浮かびあがってくる。こうした関係は、従来もっとも根無し草的性格を強く持っていたと思われていたルール炭鉱労働者において確認されているところであり、こうした観点から見直せば、マルク諸都市の流動・移住人口たる都市下層民の独自の社会的結合関係が析出されるかもしれない。

第三に、労働者のアソツィアツィオンは個人主義的組織原理にもとづく結社とみなされ、主として熟練工、手工業者層の組織と考えられ、不熟練工やその他の都市下層民は、こうしたアソツィアツィオンが組織された結社に転化することによってアソツィアツィオンの関係に組み込まれたと考えられているようである。こうした転化によって、労資関係は組織的対抗の時代に入るものとされる。しかし、こうした転

化は、19世紀末期のドイツ社会の階級的対立の激化として表現しうるのか、逆に、組織されなかった労働者大衆が労働者・職人の職業・政治結社へ組み込まれることによって体制内化への道を歩むことになったことを示しているのか、という問題は残ると思われる。社会的結合と孤立との矛盾という結論そのものは疑問の余地はないにしても、両者の矛盾の具体性がいまひとつ浮かんでこないのは評者の読解力のなせる業なのであろうか。

同様のことは、労働者文化クラブについてもいえよう。氏は、労働者文化クラブが市民社会の中で閉鎖的対抗の世界を形成しつつ、社会的に統合されていくものと把握した。しかし、この指摘そのものには異論の余地がないとしても、労働史・社会史研究における論争点、たとえば労働者階級の階級意識の解体として把握できるのか、あるいは労働者のブルジョア化の結果、社会的統制の結果とみなしうるのか、あるいは社会帝国主義的な意味での社会的統合化の過程において捉えうるのか、逆に、19世紀後半におけるドイツ第二帝制に対する対抗文化として労働者の独自のヘゲモニーの確立とみなしうるのか、このような諸問題に対する有効な回答になっていないという点である。

評者のこうした疑問点にもかかわらず、本書が歴史的具體性に欠けた「市民社会」論に対して歴史的現実性を加味しようとした点において社会経済史研究に貢献をしたことは疑いない。同様のことは社会層分析においてもあてはまる。著者の功績はなによりも中世都市から近代都市への歴史的発展の連続と断絶の矛盾した過程を、経済的、社会的、政治的側面において把握しようとした点にある。

矢 野 久

(経済学部助手)